



特殊型乳がん

(とくしゅがたにゅうがん)



※内容を簡素に記載しております。詳しくはHPをご覧ください。

特殊型乳がんについて

乳房に発生した腫瘍のことを乳腺腫瘍といい、そのうち悪性の上皮性腫瘍を乳がんといいます。がん細胞が乳管や小葉内だけで増える場合を非浸潤がんといい、乳管や小葉の膜を破って外に出ている場合を浸潤がんと呼びます。浸潤がんはさらに組織型に応じて浸潤性乳管がんと特殊型に分類され、特殊型は浸潤がんの約10%と報告されています。特殊型は更に組織型に応じて、浸潤性小葉がん、管状がん、篩状がん、粘液がん、髄様がん、アポクリンがん、化生がん、浸潤性微小乳頭がん、分泌がん、腺様嚢胞がんなどに分類されます。特殊型では、組織型の特性に基づいて薬物療法を選択することが望ましいとされていますが、患者数が少ないためランダム化比較試験はほとんどなく、確立された治療法はありません。

悪特殊型の中でも主な組織型

- ◆浸潤性小葉がん・・・発生頻度は乳がん全体の約5%で、50歳以降で好発します。ホルモン治療や化学療法などの薬物治療は、通常の浸潤性乳がんに合わせて行うことが推奨されています。
- ◆粘膜がん・・・発生頻度は乳がん全体の約3%です。粘液産生を特徴とし、ほぼ腫瘍全体が粘液状の病巣で占められるものをいいます。ホルモン受容体陽性の場合にはリンパ節転移の有無に応じて内分泌療法±化学療法を行い、ホルモン受容体陰性の場合には浸潤性乳管がんにした薬物療法が推奨されています。
- ◆アポクリンがん・・・発生頻度は乳がん全体の約1%です。薬物療法は通常の浸潤性乳管がんに合わせて行うことが多いです。
- ◆髄様がん・・・発生頻度は乳がん全体の約0.3%です。薬物療法は浸潤性乳管がんに合わせて行うことが多いです。
- ◆管状がん・・・発生頻度は乳がん全体の約0.2%です。ホルモン受容体陰性の場合には通常の浸潤性乳管がんにした薬物療法が推奨されます。
- ◆腺様嚢胞がん・・・発生頻度は乳がん全体の約0.1%です。トリプルネガティブ乳がんの所見を示す症例が多いにも関わらず、10年生存率は約95%と極めて予後良好であることが特徴です。

